青春の記録

7

愛あるところ
恋愛と人生

編集・解説＝多田道太郎

三一書房

青春の記録

7

愛あるところ
恋愛と人生

編集・解説＝多田道太郎

三一書房

青春の記録　7　愛あるところ　編者　多田道太郎

一九七三年六月十五日　新装第一版第一刷発行

発行者　竹村　一
印刷所　文栄印刷株式会社
製本所　東京美術紙工

株式会社　三一書房
東京都千代田区神田駿河台二の九
電話　〇三（二九一）三一三一番
振替東京八四一六〇番

©一九七三年

0330—739407—2726

愛あるところ——恋愛と人生

目次

I　揺れ動くこころ　4

幾度目かの最後　6　久坂葉子

愛と惑いの記録　38　石垣綾子

動揺　64　伊藤野枝

ローマ字日記　102　石川啄木

II　愛のひらめき　116

若きいのちの日記　118　大島みち子

欺かざるの記　135　国木田独歩

石坂ミナへの手紙　151　北村透谷

愛と死のかたみ　161　山口久代

III　おんなの立場　180

現代花嫁気質　182　森村桂

クラクラ日記　196　坂口三千代

女ひとり　236　ミヤコ蝶々
人間ゾルゲ　265　石井花子
解説　295　多田道太郎

コラム

愛は死と共に　山崎富栄　16
山田耕筰への手紙　徳久泰子　85
菅原芳子への手紙　石川啄木　107
愛と死をみつめて　河野実　122
唯、かぎりなくさびしい　芥川竜之介　141
天国の案内者たる貴妹よ　平野友輔　156
いのち愛し　淡谷のり子　251
死と愛の書簡　山崎淑子　283

装幀＝長谷川元吉
中扉絵＝東千賀

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

青春の記録7

愛あるところ——恋愛と人生

I　揺れ動くこころ

幾度目かの最後　久坂葉子
愛と惑いの記録　石垣綾子
動揺　伊藤野枝
ローマ字日記　石川啄木

6

幾度目かの最後

久坂葉子

久坂葉子は、昭和六年神戸に生まれた。山手高女を経て昭和二十三年、相愛女専音楽部を中退。翌年、神戸の同人誌「VIKING」に作家の島尾敏雄の紹介で参加、昭和二十五年には小説『ドミノのお告げ』で芥川賞候補になる。昭和二十七年の大晦日の午前二時ごろ、最後の手記を書き終え、午後九時四十五分ごろ、京阪神急行六甲駅で飛び込み自殺。二十二歳。

本書に収録した『幾度目かの最後』からは、豊かな才能をもった新しい女として生きようとする志と、三人の男たちの間を動揺する恋する女の心との葛藤が、自殺までも戯画化せずにはいられない彼女の内部の〝作家魂〟と激しく火花を散らすのを見ることができる。

熊野の小母さんへ。

あなたには四、五年も昔から、よくお便りしてます。けれど、こんな殺風景な紙に、宿命的な味気ない字を書くことは、はじめてです。いつも、信州の紙とか、色のついたアート紙に、あるいはかすれた筆文字で、あるいは、もっと、面白くきれいな字――いやこれは、おこがましいかな。でも、あなたは、私の字を好んでくれました。――で、お便りしたものです。なぜ、この紙を選んだか、おわかりですか。実は、あなたにたよりしている気持で、私は、おそらく今度こそ本当の最後の仕事を、真剣になって綴ろうというのです。これは富士正晴氏の手に渡るでしょう。そして、彼の意志かあわれみで同人雑誌のVILLONか、VIKINGに印刷されるでしょう。その活字が、あなたの手許におくられるだろうと思います。VIKINGの同人、宇野氏が、あなたを御存知だから。私はこれを、二十二日、つい六日前に書いた〈鋏と布と型〉という舞台のものを、もう一度、あらためて、私の最後の仕事にするつもりです。これは、小母さんに関係のないことだけど、その芝居は、もし上演されるなら、私がしばらくなりとも籍をおいて、すでに愛着を抱いていた、現代演劇研究所で上演してほしいものです。役は、

マネキンを川本さんに、彼女は音楽的な感覚をもっているし、舞踊ができるんだ。ついでに、私ののぞみもつけたしたら、おどけたアクションをつけてほしいこと。デザイナー諏訪子は、私のはじめての芝居〈女達〉の、久良良をしてくれた前田さんに、音楽は、徳永さんにしてほしい。それから、演出は、くるみ座の北村さんが、してくれるなら、ぜひしてほしいのだ。私がするつもりだった。彼は、おそらくやってくれるだろう。この原稿も（芝居の）VILLONかVIKINGに、富士さんは、のっけてくれるだろう。

小母さん。この原稿全部、あなたの興味ないものかも知れないことだけど、とりあえずよんで下さい。

今、九時二十分頃でしょう。今日は十二月二十八日。御宅へ御邪魔して。神戸へ戻り、メコちゃんという、屋台の焼とり屋で、一本コップ酒、四本の、かわつきのとりを食べ、そこから、七十円で帰ったの。メコちゃんのところで、私は、こんな会話を、知らない客といたしました。その客は、三人いて盃一ぱいの酒と、ピース二本くれたんです。

「どっか、近いところで、雪がうんとつもっているところ、知らない？」

「神鍋（かんなべ）」

「スキーしにゆくんじゃないの、雪見にゆくの、人のいないところ」

私は、そう云いながら、真白につもった雪の中を、ゴウ然とはしる汽車の音を、想像しました。

一人の男は、簡単な地図をかいてくれました。神鍋の近所なんです。だけど私は、その地方に魅力がなかったもんで、びわ湖の付近に、静かな雪のところがないかと云いました。別の一人が、

「タケフがいいよ」

タケフとは武生とかくんだそうで、米原（まいばら）の先、北陸線だそうです。私はそこへ行こうときめたんです。

風邪をひいていて、のどがからからします。叔父たちがきて、八畳の間で、麻雀をしてます。私は、部屋で、いろりに火をたき、湯たんぽを足にいれて、今、書いているんです。

小母さん、一月四日、再会を約束しましたね。ごめんなさい。今日はいい日でした。ちっちゃい御弟子さんが、ソナチネなどひいている間、私は昔を思い出しました。やっぱりソナチネをやったのですもの。みんな知ってる曲ばかり。でも私の方が、ちょいとばかりあの頃、うまかったようです。さて最後に、私は、アルベニスをひきました。つい先達（せんだつ）日、大阪の笹屋で、

楽譜をもとめたばかりなので練習不足だし、弾きなれないピアノで、ソフトペダルが、とてもききすぎて、戸惑っちまい、不出来だったと思います。三曲とも、とても好きな曲です。タンゴには、少し思い出などあったりしてね。さてその後、御馳走をいただき、お遊びをして。でも、私は、まるで、他のことばかりを思いつめていました。

小母さん。この前にうかがった時、実は、もうお目にかからないつもりだったのです。門のところで握手して下さいましたね。

うんと苦しんで、その苦しみが、あなたを生かすでしょう。小母さんの御言葉を、その時、二人でガスストーヴをはさみ、煙草をすってましたっけ、そのお言葉を記憶してます。私は、二十二日（その日の三日ぐらい後ですか）に、黒部へ行って自殺しようと決めてたのです。ああ、火がとてもよくおこってます。小母さん。小母さんの御言葉は、むごいほどよ。苦しむのは、私もうまっぴらなんです。苦しむのは嫌よ。私云いましたね。三人の男の人のことを。三人のちがった愛情を、それぞれ感じながら、私、罪悪感に苦しむって。私、この三月、薬をのんで、失敗して生きかえりました。妻のある人を愛したんです。このこと、申し上げましたね。私は、生きかえって肺病になり、半年間、寝ている間、彼への愛情と憎悪に、ひどく自分をこまらせたんです。そして、にくみました。ものすごく。彼のことを人々に云いました。云うたびに、彼への愛情がうすらいでゆくんだと、自分で独りぎめしながらね。病気がよくなって、彼に会った時、つめたい表情で、彼は私に、嫌味のようなことばかりを云ったもんです。私はもう自分の気持に終止符をうちました。そして、十一月頃、そうだ二十日なの、その日に、貸していた金額四千円をもらうため彼に会いました。彼はだまって、そっと、四千円出し、はやくしまえ、って云ったわ、それまでに、私は、ずいぶんでたらめを云いました。結婚するんだ。来年。そんなことを、衝動的に、たくさん云ったのです。じっと私の顔をみてました。そして、次の木曜日、再会を、彼の方から云い出したんです。映画館の前で別れる時。握手した時。私は、自分で、彼をさげすめ、さげすめと号令しながら、だんだん、愛情を自分でみとめてしまうようになっちまった。小母さん、私はその夜、京都へ行って、別の人の、愛撫（あいぶ）をうけたんです。彼のことを少しのべます。今、私がとても愛している人なんだ。病気で寝ている時、れもんをもって幾度か見舞に来てくれてい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

るうちに、私は愛というより、ほのぼのとした、わけのわからない感情を持ちはじめたのです。過去の人とは、まるでちがう性格だし、風貌だし、動きでした。だから、私は、過去の人とのやぶれた夢を彼に再現させようとしたのです。最初はもちろん、インタレストだったかも知れません。でも、ものすごくひかれはじめました。彼の中には、清浄さだとか、純粋さは、見出せません、生活に淀んでいるみたい。おかしな表現かもしれませんが、谷川ではなしに、もう海に近い、そして船の油や、流れて来た、汚ないものが浮んでいる川の中に、どこへでも行け、といった気儘気随でいる流れ木のような感じの人なんです。私は、会うたびに、どんどんひっぱられてゆきました。彼も、私に、最初、興味とか、いたずら気しかもたなかったでしょうが、とても愛してくれました。十月頃だったか、いえ九月の末頃かしら、一度、私すっかり、嫌いになったことがあります。それは、作曲家のT氏夫妻とのんでその後トーアロードで、知らぬ婦人にいたずらしたことです。大へんな侮辱を加えたんです。私は女だから、とてもそれを平気でみてはおれませんでした。あげくの果、私のきらいな職業の巡査さんに、説教されたりして、いくら飲んでるからって、とてもその行為はゆるせなかったのです。その夜、泣きたいような気持でした。そして、やっぱり、私は過去の人を愛してるだろうと思ったりしたんです。だけどその後会うたびに、そして手紙をもらうたびに、私は自分の感情をおさえることができなくなりました。すっかりもう、その人のことが、心の大部分を占めはじめたのです。京都での夜抱擁と、接吻をうけて、私はとても嬉しかったのです。過去の人を忘れてしまえと思いました。忘れられそうだった。単純よ。私は。

小母さん、だけど、私は、駄目。一週間おいて、過去の人に会った。駅で小一時間、待った。もう冷たくしよう。彼には、通り一ぺんの挨拶でわかれてしまえと思った。私は、だけど何てひどい女でしょう。あの夜ほど、自己嫌悪にみちたことはありません。私は、彼とのみながら、お喋りしながら、また、自分の彼への愛をみとめてしまったのです。彼の本当の愛情を感じることができたんです。彼を私は誤解してたんです。彼はやっぱり、私を真実に愛してくれました。現実とか、社会とか、そんなことをはなれて、愛し合うのだとお互に申し合せました。彼には子供が生まれ、私は、その一人の、私にとって何かみえないつながりのあるその子供のことのために、彼の妻より一歩さがった、

愛情をもちつづけはじめたんです。彼のことを悪く云い、そう思ってた私自身を、恥じました。大へんな罪悪感なんです。でも彼は私をとがめなかった。ゆるしてくれたのです。後悔しない。私は今幸せだ。私のその言葉に、彼は、喜んでくれたのです。二人で歩きました。小母さん。私たちは、ある横道の、うすぐらい道のほとりにある、一部屋にはいりました、あなたの子供がほしい。私はさけんだのです。小母さん。私は真実それをねがった。だけど小母さん。私は、新しく愛した人の存在が、私のすぐ傍によこたわっていることに気づきました。別れるなんぞ云わない。また会う日までと云って、自動車から降りて行った過去のその人の後姿を見送って、一人になった時、私は、恐ろしさで一ぱいでした。私は家へかえり、いそいでレター・ペーパーを、ペンをとり、新しく愛しているその人に、手紙をかきました（いや、その翌日だったかも知れませんが）。罪深い女だと。昔愛した人に会ったのだと。そして過去の彼を愛しているんだけど、その過去は、たちきられたものじゃない。現在につながる過去なんだ。手紙が彼のところへついた翌日だったか、その日か、彼は夜おそく、神戸へ来ました。そして、過去愛してたというのか、今なおかを私に問うたのです。私は、過去だと云ったんだ。過去はたしか。だけど、過去は現在につながっているのだ。やはり今も愛しているんだ、って云えなかった。別の感情で二人を愛しているなど、それは、実に卑劣ないいわけです。だけど、実際私は、そうだった。それは夏の太陽みたいな、輝かしい猛烈な愛情を求める気持と、静かないこいのような沈んだ青色のような愛情を求める気持と。だから私は、もう過去の人へ行動はしないつもりでした。

小母さん。私は頭の中が整理できない。いや心の中を整理することができない。だから、ゆっくり思い起こして、事実をかいてゆきながら、ぬけているところもあるだろうと思います。だけど、私は小説書いてるのじゃない。正直な告白を、真実を綴っているのです。だから、ここにかかれたことは、すべて、まちがいなしに本当なんだ。本当の私の苦しみで本当の私の自責なんです。

小母さん。順序よくかくことができないし、字も荒れて来た。だけど私、止めないで書いている。

小母さん。それから、まだ一人の男性が私の付近にいるのです。彼を、青白き大佐とよびましょう。そのいわくは後にして。彼とは、夏すぎに妙なお見合いをしたんです。病気がよくなり、だけど私にとって希望

も何もなく、誰でもいいから結婚するわ、と洩らした言葉を、青白き大佐の兄貴がきいて、私と大佐を私の部屋で、会わしめたんです。ところが、お互に好きになれなかったため、何のはじらいもなく、ずけずけ云い合ったもんです。彼が作曲をしてたんだということをきいて、音楽のことなど、まるで色気もなく喋ったもんです。その後、家にレコードをききに来たり、お茶をのみに行ったりしましたが、私は、彼の才能に、びっくりしながら、好感さえも抱いてませんでした。今、商売人の青白き大佐が、音楽の話などして、郷愁ではすまされぬ心の動きを、私はにやにや笑って面白半分にみてました。私がひきあわせた作曲家のクワルテットの楽譜をみて、彼はおそらく、気持がおだやかじゃなかったことでしょう。喫茶店や何かで、いい音色に出くわすと、彼は堪らなく落ちつきなく、耳にはいる音の流れを追っているのです。私は意地悪く、その表情を観察したりしてました。

小母さん。青白き大佐は、私を嫌いだ、嫌いだといってたのです。だけど、よく私を訪問しました。そのうち、私は青白き大佐と結婚したら、幸せになれそうな気がしたのです。彼は、とても大人だから、私が何を云おうと、何をしようと、眺めてくれるんです。私は神経をつかわなくて済むし、気楽だろうと思ったのです。そして、私と青白き大佐は、ついに婚約しました。それがふるってるんです。契約書をとりかわしました。拇印を押しました。だけど、私は実際のところ、真剣に結婚を考えてはいなかったのです。だから、買主が大佐、売主が私。売物は売主と同一のもの、ただし、新品同様、履行は、昭和二十九年。さらい年です。など二人でとりきめながら、しごくかんたんに契約したわけなんです。彼の気持などは、私、ちっとも考えないし、想像もしなかった。それが、十一月十七八日のことです。人にもし喋ればこの契約は放棄になるなどという条件まで、すみでしたためたものです。ところが、私は、まるで冗談半分だったので、四五人の人に、結婚するんだと云いました。しかも、来年しますなどと。なぜ、大佐が結婚を昭和二十九年にしたかは、後ほどにまわします。だから私の過去の人に会った時、結婚するんだ。その人はかつて作曲家で、など云ったのは、まんざらでたらめでもなかったわけです。大佐は、私が、新しく恋をしていることも過去の人をまだ愛し、そのために苦しんでいることも知っているんです。京都での一夜の時も、大佐は傍にいました。だけど私は平気でした。なぜなら、大佐とは、お互に惚れ

ぬこと、などという条件があったのですから。それに私は、恋愛を結婚までもって行くことに反対してたんです。私のような、過激な、情熱のかたまりみたいな女は、恋愛して、そのまま結婚することは、とてもできない。恋愛を生活に結びつけられないんですの。

小母さん。それに、私には、三代目の家族が傍にあるのです。三代目の家族の一人なんです。有名な親をもち、有名な祖父、曾祖父をもち、貴族出の母親をもっているんです。その悲劇は、どうせ、このつづきにかきますから、今ははぶきましょう。私を死にいたらせる一つの原因にでもなるんでしょうから。一番大きな原因と云えば、もちろん、厭世(えんせい)でもなく、愛情の破局ですけれど。

小母さん。今ちらと、小母さんと共にすごしたあのふんいきを思い出しました。いつもいつも花がありましたね。小母さんは花が好きな人。田中澄江さんという劇作家の人の作品には、必ずのように花が出てくるそうです。だけど、小母さんと花の方が、もっともっと近よったつながりがあるみたいだと思います。

さて、もとへ戻して。

小母さん。私は三人の人が私の心の中でメリーゴーランドのように、ぐるぐる私のまわりを舞い出しているのを、おだやかな気持で見てはいなかった。だけど、それは長くはなかった。私は新しく恋をした人に、すべて、私の心がひきずられてゆくようになったのです。青白き大佐とはよく会いました。だけど、まるで私はいつも他のことを考えてたようです。子供が生まれたら、ピアニストにするんだなんて冗談を云いながら、私は、彼の子供なんか、生める筈はない。生みたいと思わない。と心の中で思ってました。だけど、気にかかることが一つあったのです。なぜ、彼が、すぐに結婚すると云わず、二十九年にしたかということです。ああ、その告白をきいた時、私は身ぶるいをした位です。このことは、世界中に私しきゃ、大佐と私しか知らないことなんだ。だから、やはり、ここに書けない。ただ、一人の女性がからんでいる——私の知らない——ということだけをのべましょう。私はその話をきいて、彼が不幸だと思いました。そして、私のような罪深い女——その時すでに、私は、過去の人に対する罪悪感と、新しく恋をした人に対する罪悪感とで、苦しんだのですから、過去の人に一生あなたを愛すると思い、告白し、新しく恋をして彼の愛情にそむいたこと。それを、心の隅にのこされている過去の人へのやはりわずかな愛情を、新しい人へそむいてるみたいな気がして。——

と一しょになって、慰め合うことが、いいのじゃないかとも思い直したりしたんです。そのちょっと前に、私が非常に愛しはじめた――その人のことを、鉄路のほとり、と呼びましょう。彼は高架の下のしめった空気がすきなんだから――その人、鉄路のほとり、とのある心の事件があるんです。異人街の道をあるき、別れる時に、彼の過去をきいたのです。もちろん、すでに私の過去を彼は知っているんです。誰ということも。鉄路のほとりと、私の過去の人、かれを緑の島と呼びましょう。沖なわ節をよくきかせてくれたから――とは知り合いなんです。それはさておいて、彼の告白は痛く私の胸にささりました。というのは、どうして、キャタストロフがきたのかと尋ねたら、お互に嫌になったんだ、と彼はこたえたのです、そんなことあるでしょうか。そんな恋が存在するのだろうか。そして、その彼女、私はみたことがあるんですが、彼女と鉄路のほとりとは毎日のように顔をあわしているんです。平気でおそらく喋ることもするだろう。何てことでしょう。まるで不透明。まるで馴れ合いの恋なんだ。嫉妬深い私、だけど、私は嫉妬したりはしなかった。ただ、いやなことをきいてしまったと思ったんです。本当のところ、私はすこし彼への愛情がへっちまったようでした。翌日会った時、あなたがわからなくなった。と私は云いました。恋って、もっと真剣なものであるはず。

そんな私の心の動きがあったため、青白き大佐に、ある感情――つまり一しょになっていいだろう――を持ったのです。

小母さん。退屈？　でも辛抱して下さい。私は書きつづけます。今、麻雀が終わったらしく、家族の人が、点棒のかん定を大きなこえで云い合ってます。

私の心は穏やかではなかった。ざわついていて、神経がびりびりしてて、いつも空虚のようで、いや又反対に、一ぱいにつまりすぎている心。恋愛のことの他に、仕事ができない。書けない。家庭のこと。そんなことも余計に神経をびりびりさせた原因にもなるでしょうが、とにかく一刻として落ちつきがなく、日常には、義務的な仕事が多く。というのは、私の芝居が上演されることになったんです。間近にせまっている。その芝居の音楽を作曲し、弟にトランペットをふかすこと、太鼓のアレンジ。切符のこと、税務署に文句をつけられたり。朝から五六本も電話がかかる。新聞のコントたのまれる。この二月に描いた、唐津での陶器がおくられ、その代金を書留で送ったところ、郵便局

の手ちがいで、何度も念を押しにいったり、私は、実にオーヴァーワーク。疲れてるから、ますます神経が鋭敏になり、いらいらする。

さて、舞台稽古の日になった。十二月の十二日。私は、太鼓をかりに、知人のところへ行き、太鼓をかりた。小母さんのところにも寄ったんだっけ。かすりの着物をきてた時よ。私の描いた帯しめて。御影の駅で、木綿の大きな風呂敷に太鼓をつつみ、それをもって、その時、私は、鉄路のほとりに会いたい気持で一ぱい、大事な仕事が山積のようにあるのにかかわらず、大阪へ行ったのです。よく行く喫茶店へゆきました。彼がいそうな気がしたんです。ドアを押しました。鉄路のほとりは、女の人と一しょに話をしてたんです。私は途端に、かあっとなった。今から考えると私は実にあわて者。だけど、すぐそうなるの。それがたとえ、彼の妹であろうとも。私は会釈をかろうじてした。知ってる喫茶店の女の子が、何その風呂敷？　と私にきいた時、たいこ、とこたえる声が自分でかすれてるのを知りました。はなれたコンパートメントにこしかけて、私は煙草に火をつけて、胸の中でガタガタ鳴っているものを落ちつかせようと努力しました。しばらくして、——その間、私は鉄路のほとりの方を、ちっともみなかった——鉄路のほとりは私の傍へ来ました。五時に来るからまってて、と彼は云いました。私はうなずいた。だけど待つ気はなかったのです。ドアのきしむ音、二人の足音がもつれ合って出て行く。私は、コーヒーをのみ、気持をおちつかせました。私の次の行為、緑の島へ電話をしたのです。全く、衝動的に受話器をとりあげたのです。緑の島は居合せました。私はおいそがしいですか、とききました。暇だと云うのです。そして出かけて行くと云うんです。私は、居所を教えました。ちょうど、私の友人の作曲家——たびたびこの人のことが出て来ますが——の仕事を頼む口実があったわけで、緑の島は、その仕事を一つ、持って来てくれたのです。私たちは、自動車で別れた日以来、半月ぶりで会ったのです。穏やかに語らいました。主なことは音楽の話でした。それから、緑の島の仕事のこと。次から次から、話はつきません。だけど小母さん、私たちは、静かに話し合っているのですよ。お互に、お互の心をほしいとは思わないんです。それは、もうすでにすぎた恋だったわけ。小母さん。やはり終わっちまった恋でした。それでよかったんだ。私は、ほっとしたんだ。だから五時までに彼が帰ることをねがった。やはり、私は、鉄路のほとりを待つ気になったのです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com